

校友會誌

第三十四號

大正十四年二月

滋賀縣立彥根中學

目次

口 繪

○大正十四年度卒業生(第卅七回)

詔 書

校 歌

勤 儉 標 語

論 說

- 時流に悼さして
- 我國民性を論ず
- 疑
- 吾人の前途
- 信念と修養

目次

- 五丙 青山 正 郎
- 五丙 赤 田 盛 夫
- 五丙 堀 川 辰 之 助
- 五丙 赤 田 盛 夫
- 四甲 名 畑 榮 一

研究資料

- 口腔衛生の設備を望みて
- 事實の權威
- 節約
- 同
- 同
- 同
- 大楠公論
- 青年期は人生の危機
- 伊吹植物

文 苑

- 田舎の四季
- 漫歩
- 淋しき町より
- 木川君の死を悼む
- 地蔵詣の道行
- 鮮人の死と私

一

- 五乙 近 藤 德 三
- 五丙 青 山 正 郎
- 五丙 脇 坂 榮 二
- 五甲 天 方 健 一
- 五甲 富 田 忠 之
- 四乙 中 野 正 太 男

- 四乙 松 宮 誠 一
- 四丙 北 川 壽 三
- 四甲 石 原 健 次 郎
- 同 大 谷 義 雄
- 同 吉 田 諦 成
- 同 堤 田 泰 雄
- 二甲 大 久 保 眞 順
- 二乙 坂 本 至 誠
- 四甲 名 畑 榮 一

目次

- 呻き
 - 月下の悲哀
 - 素描
 - 月の夜
 - 地蔵盆
 - 早魃の所感
 - 未知の人
 - 夜の使
 - 黄昏れ行く歌
- 四乙 中 正 男
四甲 辻 孫 四郎
四丙 北 川 壽 三
三甲 田 中 謙 三
二甲 大 久 保 眞 順
同 同
二丙 中 川 英 一
一乙 山 口 彌 平
同 同

○岩國宮島見物記

詩

藻

- 五年級修學旅行記
- 四年級修學旅行記
- 御嶽富士山踏破の記

紀行

- 五年 河村 庄次
五丙 若 林 展 次 郎
寺 脇 太 次 郎
山 田 千 里
青 山 正 次
吉 田 謙 成
名 畑 榮 一
藤 本 吉 一

- 星の嘆き
- 波の歌へる
- 青春
- 早笛悲し
- 春秋の哀歌
- のび行くもの
- みづ
- 月見草
- 夜の驛
- 夏の朝
- 焰

- 五丙 青 山 正 郎
同 桑 原 利 夫
同 藤 本 吉 一
五乙 藤 本 惠 順
四乙 中 川 正 男
四丙 北 川 壽 三
四甲 玉 川 道 寛
三甲 佐 藤 寛
二甲 澤 教 一
二丙 中 川 英 一
二甲 兒 玉 英 一

- 二
大 橋 正 太 郎
天 方 健 一
福 山 松 太 郎
家 森 秀 次 郎
四 年 橋 詰 與 惣 次 郎
三 甲 奥 居 俊 一 郎

和歌

- 悲しき運命(舊稿)
- 初日
- 朝
- 秋吹く風

俳句

- りんご
- 偶作
- しぐれ
- 花

- 特別會員 野 間 二 郎
五乙 藤 本 惠 順
四丙 木 村 謙 一
二甲 澤 教 一
五丙 堀 川 辰 之 助
四乙 松 宮 誠 一
四丙 田 中 準 一
同 木 村 謙 一

- 武術部
- 端艇部
- 野球部
- 庭球部
- 徒歩部
- 運動會
- 應援團記錄

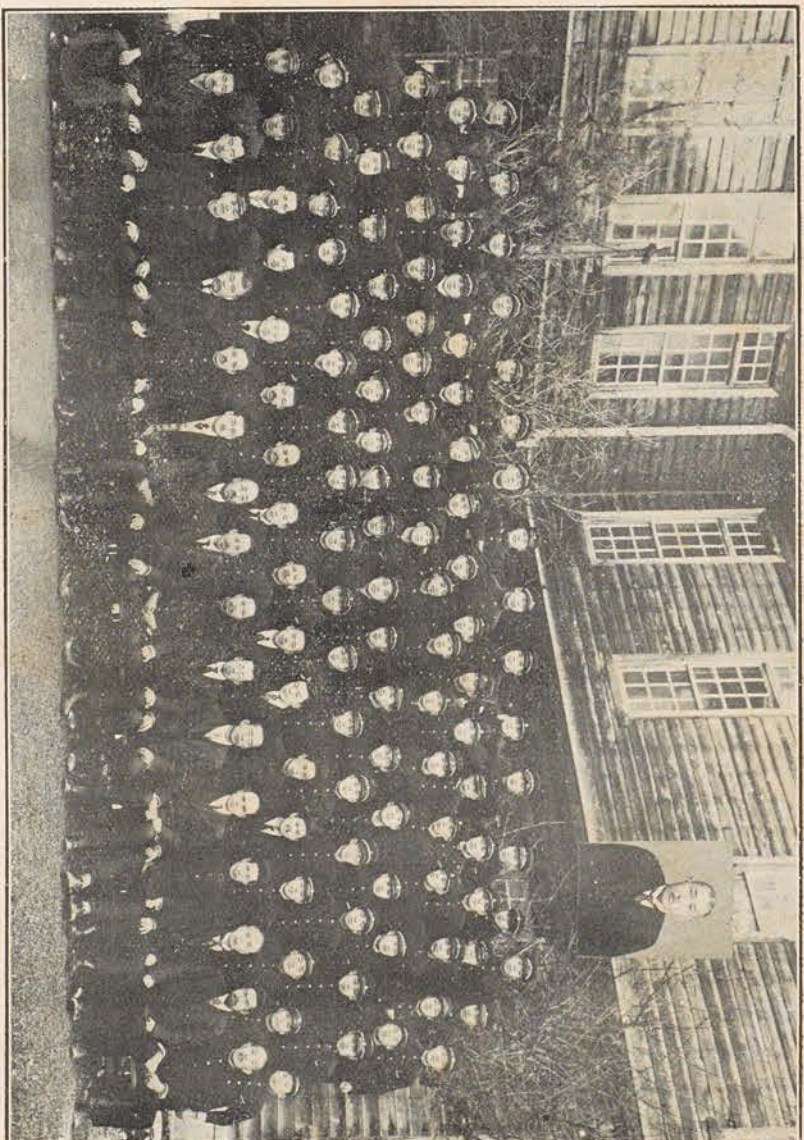
雜錄

- 學校日誌摘要
- 會計精算報告
- 編輯餘錄

部報

學藝部

目次



大正十三年
詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ溯リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕即位以來夙夜兢兢トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交々至レリ

輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツチャ是レ實ニ上下協戮

振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實効ヲ擧クル
ニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智徳ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ
浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシ
テ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ
博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ出テハ一己ノ利害ニ
偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ル
ヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌々國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾
臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽

攝政名

大正十二年十一月十日

書

彦根中學校々歌

湖^{うみ}べの春^{はる}にかざられて
雲^{くも}ふきはらふ膽^{いであ}吹山^{ふきやま}
ふもとの若葉^{わかば}あたらしく
われらが園^{その}はかゞやけり
緑^{みどり}しづけき學^{まな}びやに
智徳^{ちとく}のとぼそ啓^{ひら}きつゝ
明^{あや}はなれゆく人^{ひと}の世^よの
われらが窓^{まど}に光^{ひかり}あり
不撓^{ふたふ}の決意^{きえい}と力行^{りつこう}の
わかき生命^{いのち}にまもられて
幸^{さい}どほまれに美^{うつく}はしく
われらが園^{その}はかゞやけり

剛健^{こうけん}自助^{じじゆ}の門^{かど}によりて
湖畔^{こはん}のまもり嚴^{げん}かに
たてる金龜^{こんき}の學^{まな}びやの
あまほまれある幾^{いく}春秋^{しゆんじゆ}
金剛^{こんがう}不壞^{ふぐわい}のこゝろもて
つとめ勤^{いそ}しむ森^{もり}のかけ
われらが窓^{まど}の燦爛^{さんらん}と
あまほまれある幾^{いく}春秋^{しゆんじゆ}
天^{てん}のかゞやき地に享^うけて
こゝろ澄^すみたる琵琶^{びわ}の湖^{うみ}
金龜^{こんき}の春^{はる}とこしへに
われらが園^{その}は新^{あらた}なり

彦根中學校校歌

1=96

〜調四分ノ四拍子

5 5 1. 5 | 3 2 1 - | 5 1 2 3. 1 | 5 - 0 |

ウミベノ ハルニ カザラレー テ
みどりし づけき まなびやー に
フダフノ サダト リツカウー ノ
がうげん じじの とによりー て

6 6 5. 5 | 4 4 2 - | 5 3. 2 1 2 | 3 - 0 |

カモフキ ハラフ イブーキヤ マ
ちとくの とぼそ ひらーきつ つ
ワカキイ ノチニ マモーラレ テ
こはんの まもり おごーそか に

5 5 3. 7 | 1 2 5 - | 1 2 3 4. 3 | 2 - 0 |

フモトノ ワカバ アタラシー ク
あけはな れゆく ひとのよー の
サチトホ マレニ ウルハシー ク
たてるこ んきの まなびやー の

f
5 5 3. 5 | 6 6 5 - | 1 2 3. 2 | 1 - 0 |

ワレラガ ソノハ カガヤケ リ
われらが まごに ひかりあ リ
ワレラガ ソノハ カガヤケ リ
ああほま れある いく しゅん 秋

勤儉標語

奢りは地獄の一丁目

使ふ一銭郵便局へ

あれ見やしやんせ小さな蟻も

ためて苦なしに冬を越す

大きく拵いて小さく暮せ

仕事残さず金のこせ

何が好きじやとお金に問へば

私しや働く人が好き

働いて儲けて溜めて生かして使へ

奢侈の川下に貧苦渦まく

五年	三和康三	四年	山田千里	四年	佐藤見三	三年	山口久彌	三年	西澤新藏	三年	樋口良恵	二年	居長英次郎	二年	西村次郎
----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------

雨は天から泪は目から

富は我身の質素から

不平等はずに働きませう

末は笑顔で見る貯金

あれこれと珍らし物に手をかけず

廢物利用で急ぎませう

先づ考へて買ひませう

金がほしけりや眞面目できばれ

勤と儉との鉢巻締めて

金を溜めて仕事をためな

流行を追ふものは貧苦に追はる

勤儉の徳や節季の高軒

二年	渡邊祥次郎	一年	久米孝男	四年	田中準一	四年	伊藤賢藏	三年	北川治太郎	一年	原留次郎	一年	西川英吉	五年	藤本恵順
----	-------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	----	------	----	------



論

說

時流に棹さして

青 山 正 郎

黎明の鐘が四方に鳴り亘つて、若き者よ、覺めよ、覺めよ、と耳朶に響く。徒に形式を云々するのは過去のことで、現代は内容の充實を欲求してやまない。永い冬眠から漸く醒めた人々は、其の混頓たる域を脱して耀く旭光に浴せんことを切に望み、曉の扉を開、鍵の所有者の出現の一日も速ならんことを祈つて居る。岸邊には一艘の小舟が繫がれて居り、對岸には美しい花園が今を盛りと其絢爛を競つて居る。そして之までに幾回となく小舟に棹さして對岸の花園に憧れの旅を試みた人は數知れずあつたが無事に歸り得たものは幾何もなく、其多くは途中の岩礁に當つて行方知れずになり、偶々達し得た者の中には、喜びの餘り岩礁のあつたことを忘れてうつかり打碎かれたものもあつた。彼等は安心のため心に油斷が生じて、それに乗せられたのであつた。考へて見ると社會は丁度こんなものではないであらうか。政府が思想善導を叫ぶのが罪であるか、それを叫ばせるに至つた國民が悪いのか。此の過去五年間に得たものは何であつたか。そして我等

は今後のことを考へるとき、果して樂觀を許されるであらうか。中等教育を了へたとて、尙其の前には幾多の難關が花園への行手を塞いで居るではないか。

人生の行路には二筋ある。正道と權道、即ち表と裏がそれである。社會の欽仰の裡に愉快な生涯を送るものがあれば、反面には其生涯を闇路ばかり辿つて行き、前科者と嘲られ、爪弾かれて、其身は勿論、妻子までも到底浮ぶことの出来ない生涯を悔恨に惱みつゝ死んでゆくものもある。或は富豪として巨富を築き、別荘におさまり返るものがある。その反面には、明日の糧を如何にせんと人知れず袖濡らす哀れむべきものもある。上を仰げば限なく、下を眺めても果しない。薔薇の花は美しいけれども其の樹は恐ろしい刺がある。櫻は一時に咲き誇り、また一時にはつと散り、日本魂の精といはれて居る。そして何れも植物である。人生にも矢張り之に似かよつた事實は數多くある。唯何物も半面ばかりを考へて他の半面を顧みずにやつたことは如何なる事柄でも成功は出来難い。若し半面だけを考へてやつたことが何でもよければ、此の世には恐らく眞面目に正道を歩み行く人は其影さへもなくなるであらう。正道は權道よりも遙かに苦しい。文明の進歩は益々人間が正道を歩み行くのを困難に導く。流に棹さして對岸に渡らんとする瞬間の一棹は、誰が途中で碎けて飛ぶ身とならうと思ふものか。俯仰天地に愧ぢない身となるのは即ち正道――表を歩んだ人であり、闇にうごめく人は途中で岩礁に船を打當てた人即ち裏を歩んだ人と云はれる。けれども裏を行く者には何時まで経つても求めて居る花園は與へられない。もがけばもがく程更に遠く距つて行くといふことを彼等自身の荒み切つた心は果して知らぬのであらうか。

現代の眞に欲求止まざるものは實のある人間であることを知り、今や我等は出發の間際に當り、眞に自己の行くべき道を求めて、最初の一步から正しく、そして強く生きて行くことを考へる。これが我等の本領ではあるまいか。

我が國民性を論ず

赤 田 盛 夫

我日本民族は感情の民族である。感情の激發を抑制することが困難な民である。かくすればかくなる事と知りながら

止むに止まれぬ大和魂

この歌はよくそれを語つて居る。

かの淺野侯は熱血的な感情を抑へられなくて遂に身の破滅を齎した。かくはいふものゝ熱血的な感情の發動が必然的に惡結果を來すとはいはれない。否その激する所往々爲し難い事を爲し、收め難い功を收めることもある。最も感情的に熱血的な我民族は又最も喜怒哀樂の變化に富んで居る。怒つてはその威よく十萬の醜虜を退けた大將軍も、笑つては稚兒を親昵せしめ得たのである。雲霞と群がる敵兵をも、數とも思はなかつた。關東の荒武者も、女ども見まがう平家の公達を殺しては、悲歎の涙にかきくれて、熊谷寺の櫻を友とし一生を念佛三昧に送つたのであつた。

あゝその變化は何に譬へやうか。

敷島の大和心を人間はば

朝日に匂ふ山櫻花

吉野の山櫻！ それは我が民族の花たる武士の理想であつたのである。

感情的な者は外物に感動し易く、運命の神の爲すまゝに最も喜び又悲しみ易いものである。即ち日本民族は此の境地に彷徨して居るのである。一死以つて君國に盡し一身一家を忘れうる點は大いに外國に誇るべきであるが、然し一敗忽ち再興を計ることを忘れ、たゞ櫻花の小夜嵐に散り敷くやうに死を急ぐのは當を得

て居るものと言ふことが出來ようか。あまりに短氣に過ぎてゐるといはずばなるまい。

これこそ日本民族の一大缺點である。これがあるがため如何に過去に於て我が發展が阻害されたか又現在阻害されつゝあるかを思へば、誠に憂慮これに過ぎるものあらんやである。

疑

城 川 辰 之 助

我々が毎日食を求め體の成長を願ふ様に、我々は或物を絶えず求めて我々の精神を肥やして行かなくてはならぬ。刻々に我等の心を肥やしてその上に智の木を生長させなくてはならないのだ。心を肥やすには我等は清き疑を常に心に抱いてそれを解決して行かねばならぬ。もし我々が泥の中に鼻をつき附けて一生を終る豚の様な満足に甘んじて居るならば問題でない。もし我々が無窮にあこがれを感じ睿智を求むる人ならば誰にでも疑はある。「眞理を求めしに、我疑惑生じ、その喧騒もて、我青春をつからせき」とあるが實に眞理を求めて我疑惑生じである。だから常に疑を挾持せぬ人は眞理を求めぬ人、人生に忠實でない人、それは呼吸する屍だ、神佛を信する人にも疑がなくてはならぬ。疑のあると言ふことは其の人の信仰に動搖を來さないのみか却つて信仰の向上を促すものとなるのである。

大悟徹底とすまじ込むのはいけない。私は飽迄も不完なる動物として天地の事に關して無限の疑問を持ちその解決に小息みなく努力したい。ある一つの疑問を提げてそれを解決して行く！ なんと男らしいではないか。かくして初めて我々は信仰の道に入つて行くのではなからうか、だが一つの疑問を提げて何時までも／＼も解決出來ぬ人は神を信する事の出來ぬ人だ。佛を信する事の出來ぬ人だ。一体信する事の出來ぬ人に二種ある。

即信じやうとして信じ得られぬ人、信じやうとせぬ人である。我々は後者の誠意を認めない。我々の持ちたいのは前者の心である。

あゝ我々は疑の世界から脱し得ないのか。何時になれば疑がなくなるのだらうか。これを解決してくれるのは將して何か。

吾人の前途

赤 田 盛 夫

順風に帆を揚げて洋々たる大海に船出せんとす。これ吾人の前途なり、吾人はこの希望に生き理想に生く見よ前途は希望に充てる大洋なる事を。高等程度の學校に入り、憧影の的たりし徽章を戴き、進んで最高學府に入りて學術の蘊奥を極め、以て智識と人格とを完成し、他日社會に立ちて有爲の人物となり、その理想を實現し、天下國家の爲に盡瘁する所あらんとす。

前途の春の海の如きを想ひ、吾人はこの希望と理想とに生く。されど人生の行路は常に平坦なるものに非ず。狂濤の舟を噛むことあり、舟揖碎けて絶海に漂蕩することなきにあらず。現時世界の情勢は、永遠の平和の招來せられ、我が國は世界五大強國、否三大強國の斑に入りて、眞に泰平なるが如しと雖も、人類の競争は、單にその形式を變じたるのみ。獸的の闘争やみて、眞個に人類の優勝劣敗の世の現出せるに過ぎず。吾人豈これに處する覺悟無からんや。翻つて我が國の現状を察するに動もすれば、輕佻詭激に流れ、道義地に墜ち、國家の前途に憂悞を懷かしむるものなきにあらず。純眞なる性情を有する青年の所見、果して杞憂に過ぎざるか、吾人大にこれに惑ふ。

吾人は將來の國家を雙肩に荷はんとする强健なる剛毅なる意志を有す。社會に狂濤の渦巻くを見て徒に逡

巡避易する者にあらず。吾人の意氣これを踏破して餘あるを信す。

うきことのなほ此の上に積れかし

限りある身の力ためさん。

これなほ消極的悲觀的憤發にあらずや。吾人はうき事を以て却つて痛快事となし、悦んでこれに處し、眞にその力量を發揮すべき試金石となさんと欲す。

人智の進歩は、超努級の大艦によりて裕々として大海を踏破す。而してこれを操縦する者は完全なる智識と技術とを備へざるべからず。吾人青年は此の資格と修養すべき好時期なるを想ふ。

最大なる事を成さんと欲する者は又最大なる準備を要す。吾人は洋々たる大海を望み、肉躍り血湧くを覺ゆると共に、著實にその人格と智識とを修養せんが爲に渾身の努力を致さん事を期するあるのみ。

信念と修養

名 畑 榮 一

信念は光である。果た物事をなすに必要な一つの要素である。そもそも道德的信念とは永久的に變らぬことをいふのであるが、孔子でも佛陀でもソクラテスでも耶蘇でもあゝ云ふ偉人に對しては敵がある、第一耶蘇は殺されて居る、佛陀も殺されやうとした、孔子も又殺されやうとしたことがある。ソクラテスは毒を吞まされた併し幾ら經つても釋迦や孔子や基督の人格は決して變るものでない。其處が釋迦の釋迦たる所、孔子の孔子たる所である。彼等の人格の價值は何年經つても減じない。孔子の人格は輝いてゐる。ソクラテスも同じである。道德の價值は永遠無窮である。信念のあるものは鉄石のよりもつともつと堅固である。茲に我々の道德の信念が湧くのである。どんなことがあつても我々は動搖しない。我々は一の宗教を信する譯

ではない諸種の宗教を研究し、諸種の哲學を研究して見るけれども、確固たる信念さへあれば決して動搖しないのである。

信念は成算である豫算である、彼の英雄ナポレオン一世も豫算あれば世界も創造し得ると言ふて居るではないか。すべて人間は善をなすには渾身の力を傾倒せねばならぬ。成功する爲めには滿身の力を振はねばならぬ。アルキメデスは持つて居る槓杆が使へることならば何でも約束したと云ふ。かくしてすべての大事業は歩を進めて行つたのである。

斯くせば修養は決して苦痛ではない。然し世人は修養を苦痛だと間違へてゐる。修養は自分のために自分をよくする爲の方法であるから先づ慶ばねばならぬ。

喜んで自分から手を出さねばならぬ。世の中には饕餮蟲さへ好きな人もあると言ふのに自分のためになる修養を嫌ふとは可笑しいではないか。

修養の大半は身の爲になる書物を讀むことである人は讀書の境地から離れると意志が薄弱になる。意志の力は讀書三昧によつて行はれるものである。

その意志の力は直ちに實踐躬行である。意志といふものは實踐躬行によつて養成されるものである。實踐躬行は大切だし、それには意志の力が必要であると言ふことになる、意志の力の強い人は必ず實行力が豊富である。

されば修養と云ふも、教育といふも、其目的は同じである、自分の力で自分を練つて鍛へて行くのが修養であるとするれば教育は他の力に依つて人間を教へて生れた儘以上のものに矯め正すものだと言ひ得るのである。之れを極端に云ふと人は修養せる爲めに、教育をうけたために心膽が練れて、人格が高まり智識が進み其反對に心勞が多くなり、今迄知らずに居た事に迄心配をするやうになる。さうして生れながらの飾らない生活から遠ざかつてしまふ。つまりいふと人工で拵へた人格が出来たり二重人格が出来たり、他處行きの人

格と、平生用の人格が出来たり、嘗つて素朴な荒削りのやうな無邪氣な性質が之に隠れてしまつたりして表面に見ゆるものが悉く體裁の宜いものばかりになつてしまふ。恚うなると教育や、修養といふものゝ力が進めば進む程、人間が生れた時に遠ざかり、飾つた習慣や形式に取巻かれてしまふことも受取れる。しかし文明といふものが之れである。故に文明人といふ事は人間が天然生活から放れて人工生活に入り、天然の正直な處が次第に壞されたものゝ意味になるのである。光澤のない珠は、磨いてから、初めて輝きを放ち出す教育を人間に與へたり、修養を加へたりするのは此の光りのない山から掘つたばかりの珠に、光澤を與へるやうなものである。其れは云ふまでもなく、球の眞價を發揮さすやうに、人間の眞價を磨きに依つて發揮するがためである教育といひ、修養といひ、其の手数は無意味ではない、又無用の人工的徒勞でもないのである。生れた儘の唯我慾にばかり進む人間を、禽獸に近い域から救つたり、極端に其の性癖にばかり傾くのを矯めたりするの、磨けば價のある珠を磨くのと同じである。學校に於ける修養は要するにその天賦の才能を完全に發揮せしむる爲めである。處が教育を十分に受けても、相當の修養を積むべく力めても天賦の才能を全くもたない人間がある。此の如き人は初めから其の眞價が内になかつたのであらう。或ひは此の磨きをかけたるが爲め却つて其の本質が一變し學問の爲めに勞働嫌ひになり、學問も誇張の意味に用ひたり或は其の修養なる美名の下に隠れて惡事を働いたりするのも世間にある。故に之を以て、修養が必ずしも人間の眞價を發揮する爲めのものとは云へぬが大體に於て人を善化する事は否まれないのである。

此の時に於て唯一の研究し、考察すべき事は種類の多い教育及び修養法を多忙なる限りある人間の力がどうして選定してよいかといふ事である。修養にしても古めかしい禪の復古を叫ぶものがある、日蓮主義の活動法を學ぶ者がある。靜座法を主張するものもある。或は歐羅巴の新哲學を事々しく祖述喧傳するものがある、二宮宗を標榜する者もある。恚ふなつてくると何人も勢ひ迷はざるを得ないのである。

而して修養の理想より見て釋迦、基督、孔子は世界の三聖として尊崇せらるゝ人物なるが中にも孔子は智

情意の各方面最も圓滿に發達せし人格の模範としては寧ろ他の二聖に優る様である。孔子は魯の定公の大同冠となつて先づ少正卯を斬つて佞人の膽を寒からしめ、又齊の景公と夾谷に會しては其優娼侏儒を斬りて驕齊上下の膽を寒からしめたるが如き、以て孔子が消極的無爲の後世の儒學者と相異なるものあるを知り得るのである。且つその言論中にも勇氣を重んじ義を見て爲さざるは勇なきなり、志士仁人は生を求め仁を害することなし身を殺して以て仁をなすの語もある。

尙曾子の語を借りて孔子の道德的勇氣を述べよう。曰く以て六尺の孤を託すべく以て百里の命を寄すべし大節に臨んで奪ふべからず君子人か君人の人なしと又曰く君子以て剛毅ならざる可からず任重ふして道遠し仁を以て己れの任となす亦重からずや死して後已む又遠からずやとこれより察すれど孔子が動的方面の修養を重心としたことを知り得るのである。

事實の權威

北 川 壽 三

私達は常に或何等かの事柄に就て煩悶して居ると思ふ。若しも此の煩悶が少しも無いと言ふ人があるならば、それは漫然と世を送る醉生夢死の人か、似而非享樂主義の輩であると私は言ひたい。少なくとも煩悶は眞面目に世を送り、或は人生を研究せんとする人の當然至るべき徑路である。

人生は悲惨なものであるとは、實生活に臨んだ人々の、言ひ合したやうに口にする言葉である。而も此の悲惨なる人生に向つて根本的の解決を與へた者は一人も無いと云つて差支ない。私達は生きて居る。生きて居る故に生活がある。生れてより死に至る迄の行爲——夫が私達の人生ではないか。夫が何で依然として不可解であるのか。

理想と現實との間なる大溝渠、私達末輩の煩悶は其處から生ずる。併し偉大なる思想、人格を有する人には此の溝渠は何でもないか知れない、が私には事實たる現實を捨て、他方には行き得ぬ。悲しいが事實の前には膝を折る。終には斯ういふ人生を逃れやうとせむに歩んで行く私の心さへ分らなくなつて來る。

事實は絶對の權威である。刹那々々の現在が私達に及ぼす効果は其全生命である。併し現在の事實は自由に許さない。故に私達は事實に捉へられるか、捕へるか、此の二途より他に出づる事は出來ぬ。而も捕へられる人が多い。決して貧弱な頭腦と肉體とを有する私が何うして事實の權威を捕へ得ると斷言し得よう。しかし私はともすると朽ちんとする、荒まんとする私の心に鞭うつて一步一步と彼岸に達すべき道を辿つてゐる。そして彼岸に達し得るの時を夢見てゐる。(完)

口腔衛生の設備を望みて

松 宮 誠 一

華かな明治の時代は過ぎ去つた。而し國家又は國民の奮闘努力によつて出來上つた明治時代の文化は立派なものであるが未だ内容が充實せられない點も多くある。その充實せられないものを充實せしめて世界に誇らんとするは大正國民の使命である。

私はその中の一として我同胞八千萬の健康の保持増進の大問題である所の國家的の問題として口腔衛生について私の意見を述べたい。病原體の侵入を區別するとコレラ。チブス。バラチブス。肺炎などの如き恐るべき病氣は明に口腔から侵入して來る。又ベスト。淋病軟性下疳。麻疹等は侵入して來る所を口腔と非口腔に區別する事が出来る。又癌腫。肉腫。化膿性疾患等は續發性に全身的疾病となるもので口腔疾患に發源するものである。

此の様に恐しい病氣の病原體は殆んど口腔を通つて入るのである。而も口腔は病原體の住居地として最も適して居る。先づ第一に温度が三六或は三七度位で非常に適し、二には微菌の營養物質即ち水分、塩類、有機化合物、酸素を有し、最後には適當の湿度を有して居る。是の様な最も病原體の繁殖の理想地である口腔の衛生が深く研究されず又省みられなかつたのは實に慨嘆に堪へない所である。而し過去は仕方がないから私達は現在將來に於て此の方面に努力したいものである。

然らば如何なる方法によりて行ふべきか。

先づ第一に口腔衛生の必要と怠慢の如何に恐ろしいものであるかを通俗的に一般の人に知らし、第二には口腔検査を行ひ、第三には齒科施療所を設けて、患者を無料或は實費で診察し、防疫的觀念即ち衛生思想を一般の人にも強く抱かしめる事が必要である。

その中で最も必要な義務とするのは口腔検査である。殊に軍隊、學校兒童、職工などに完全に勵行されれば非常な成績を上げるであらう。近頃當局者も此方面に力を用ひる様になつたのは嬉しい事であるが、未だ完全とは言へない。將來の口腔衛生は齒科の衛生醫と官廳或は自治團體乃至人民が互に共同して行はねばならぬ大事な問題である。

軍隊に於ては常に野外演習或は露營行軍で口腔の衛生が忘れ易いから常に嚴密なる口腔検査を行ひ、疾患を取外して強健なる軍隊とする事が國家の義務である。

職工に於ても同様で兎に角救済の道を講じなければならぬ。

次に齒科施療所を建て衛生思想を一般の人にあまねからしめ又無料或は實費で診察する様にする設備が必要である。口腔衛生の多くの場合は齒科に屬するのである。

現に獨逸に於ても三百の施療所がある。我國も大正の紀念として此の如きものを作らねばなるまい。此の如きものは例へそれが不完全でも確に我國民の健康を増進するのである。

最後に於て私の望む所を書いて見ると、先づ第一に、小學校には齒科の衛生醫を置き、軍隊には齒科軍醫を置き、第二には料理店、或は飲食店に於て、飲食器具などの煮沸消毒を法令を以て勵行さすこと、第三には、工場に於ては勞働者の口腔検査を行ひ、無代又は實費で患者を専門學校に於て診察する事等で未だその他はあるが實行し得可きは先づ此の位である。

以上は先づ大體を述べたに過ぎないが最後に於て私は此口腔衛生は現代の内容の充實を計る上よりも醫學上よりするも又社會上よりするも、自治行政上よりするも非常に重要であることを述べて置く。

即日本國民全體としての健康、言換ふれば國家の健康の上に大なる關係あることを述べて筆を置く。

節 約

石 原 謙 二 郎

僕は一禪寺に寄宿して、肉食妻帯を許された今日でも猶妻をもたず毎日漬け物茶漬で押し通す頑固な方丈様の下に居る。最初僕は習字の時は平氣で新しい紙をどん／＼つかつて書きなほしの紙をば鼻をかんだり紙屑籠にねちこんだり玩具の紙飛行機に用ひたりして實に今から見ると無駄な事をして居た。又間食物も毎日やつたとして小僧にもわけてやつたそれだから一ヶ月實に小使錢だけで參圓でまだ足りなかつた。かうして五ヶ月程たつたある祭日の日の方丈様は私を呼んだので多分祭の小遣錢でも貰へるものと喜んで走つてゐたが意外突然横面を大きな鐵のやうな平手でびつしやりと三つ四つもらつた時目から火が出た感じがした。なんだすと僕が言ふと眞赤の顔をしてこれは何だど何時集められたか知らぬが例の書なほしの紙を山の様につまね黒くなるまで書けそしてそれを書き終つたなれば御布施の紙が五百枚からためてあるからそれを使へ又近頃間食物をやつてゐるやうだが小僧に癖がつくからそんな事をするのなら歸つてくれと頑々怒られた。私

は少し沈黙してやがて冷靜な態度で方丈様に自分のわるかつた事をあやまつた。それ以來今日に及ぶ四年間は節約をして少しも方丈様のおつしやつた言葉に背いたことはない。それで休暇の時など家へかへるが寺の嚴肅な節約の習慣があらはれて多い兄弟によい模範が示されてつくづく方丈様の厚意を感謝してゐる。

節約

大谷義雄

節約とは時間や金銭やその他の物質を自己の必要の爲に、國家社會の有用な方面に消費し、不必要な時には之等の消費を慎むことであらう。

併し唯利己主義を以て、必要な場合にも之等の消費を惜むのは即ち吝嗇であつて、節約と取違へてはならぬのである。

近頃節約と云ふことは世間で喧ましくなつて來たが、唯宣傳するばかりで、實行する人の少いのは遺憾なことである。

時間を節約するには先づ時間勵行を確守せなければならぬ。學校、役所、會社等を除いて、世の中の一般の會合に時間が勵行されるのは極稀である。それでも世の中の人々は勵行されないのを普通として別に氣にもとめない様である。人生僅かに五十と云ふことを考へても、時間を有益に用ひなければならぬといふことがわかるのである。時間の節約は延いては國家を隆盛にし、殷富にするのである。

現今の我が國情を顧るに、外は排斥を受け、内は財政困難、輸入超過と云ふ様に内憂外患が患山をなして居るのである。此の財政困難と云ひ、輸入超過と云ひ、之等は我が國の産業のあまり振はぬことや大震災等原因することもありうが、國民の奢侈贅澤に依ることも亦多大である。

昔、備前の藩主池田光政公は夜食は茶漬に焼味噌であつたとか、松下禪尼が障子のつぎ張りをしたとか云ふ様に富貴の人が儉約した例も澤山ある。

然るに現代の我が國民は、帝都復興といふ大責任を有しながら、奢侈に流れ、高價なる外國製品を求めて誇として居る。例へば、香水の輸入額統計を見るに、一ヶ年に六拾萬圓と云ふ驚く可き金額に達して居る。若し七千萬の同胞が少し心掛けて、各一人が一日に一厘節約したならば、全部で七萬圓儉約が出来る。斯くして、我が國の財政困難より救ひ出すことは必ずしも不可能ではないのである。

現今の社會の生活難は、衣食住の費用よりも寧ろより以上交際費に潰す爲に起るのである。交際も或程度までは必要であるが、はでやかな交際の爲に莫大な費用が潰えることは、我々お互が節約出来ないものではない。

自ら作り上げた財を自ら散することは自由であるとはいへ、自己の必要、將、國家社會の有用に散するは實に財産消費の道徳である。奢侈は國力衰微の氣風であり、節約は國勢振興の源泉である。此所に於て我等は物質的にも時間的にも大いに節約を守り、國家の隆昌に勤めなければならぬ。(完)

節約

吉田諦成

凡そ人として其の一身一家を保たんと欲せば多少の餘財を有して不慮の變に備へ置かざるべからず。若し一朝不幸の變ありて忽ち他人の扶助を仰がざるを得ざるが如き様にては自活獨立を叫ぶ海國男子否文明の恩義に浴する國民の面目にも關する事なり。食を求めて生活する國民平素勤勉して財産を増殖すると共に其の費用を節約して多少の剩餘を貯蓄し萬一の變に備へ置きてこそ人は始めて其の一身一家の品位を保ち其の一門

の名譽をも失はざることを得るものなれ。之に反して人少しの貯金なき時は假令孝友の道を盡さんと欲する美德ありとも將た社界奉仕の心の起ることも僅かの貯金なければ遺憾ながらも其の意を果す事能はざるべし。嘗に社界人類に益せざるのみならず他人の物を盗みて法律の罪人となりし世の小人を見るに彼等のなせし罪惡の原因は主として平素奢侈游惰の風に染み儉約の徳、節約の心懸に欠け衣食の計に差し間ふるより生ずること多きが如し。『衣食足りて禮節を知る』とは支那の古人の言にして實に一般凡人の人情を道破したるものにして世の小人に對する教訓に外ならず。されば法律上の罪人、道德上の惡人たるを惡み人の人たる道を踏み、他人の爪弾を嫌ひ、以て文化の國民たらんと欲せば教育の恩澤に浴し智能を啓發し以て是非善惡の區別を知るべきは勿論なれども其の他儉約の美風を起して先づ其の生計の途を安定にせざるべからず。特に吾等青年は父兄の仕送りに依りて學業を修め他日社界の人となりて活躍せんとする資料を恩師に求めつゝある時なれば未だ一つとして國家の爲に利益せし事を覺へず。換言すれば當今の學生空しく國家の財産を消耗する一種の寄生蟲に外ならず。吾等將來學業なりて獨立の生計を立つるに至り其の資力相當の生活をなすは固より期する所にして父兄の恩恵に依頼する間は生家の貧富を論ぜず必要の學資外は斷じて浪費せざる覺悟なかるべからず。是れ唯に父兄に對する義務なるのみならずして實に國家に對する當今の學生の當然行ふべき義務と云ふべし。然りと云へども必ずしも金錢を使はざるもの節約の人にあらず。使ふべき金を使はず與ふ可きを與へざるは吝嗇の徒にして又同情の心なき人と云ふべし。儉約は必要なれども吝嗇と同視する事なかれ。抑々節約の肝要なる所以は徒に財産を殖するに在らずして殖したる財産を善用利道するにあり。若し徒らに金錢を貯ふる事に汲々として毫も之を有益の事業に對して用ひざれば是は吝嗇家にして節約を守る者にあらず。吾等が日々仰ぎ視る彦根城には古く節約の範を示し、井伊直孝公のありしを知らざる？公は實に眞の節約家にして士風を盛んにし質朴儉束の徳を守り痛く驕者遊惰を擯斥せり其の目的は固より財産其のものにあらずして封建武士の面目を維持せんが爲めに節約せしに外ならず。惟ふに斯かる節約こそ眞の節約と

云ふべきなれば彼の汲々として唯金錢を貪り朋友親戚の不幸は勿論國家の一大事に當たりても尙一文の投費を吝むが如きは所謂守錢奴に過ぎず嗚呼節約や誠に尊ぶべく吝嗇や大に誠むべし。(以上)

節約

堤

泰

雄

大正拾二年九月一日彼の關東大震災以來我國はこれが復興に大努力をして居るが何につけても先だつ物は矢張金錢である。誰でも貧乏な我が國が一日にして蒙つたあの損害は我が國をして貧乏のどん底に落し入れた。故に我等同胞が節約に務めるといふ事は實に今日の急務である。

今日の人々殊に青年男女の中には新奇を好む者が多い。然し人に新奇を好む心がなかつたならば恐らく發明改良等といふ事は望み得ないであらう。それで新奇を好むといふことは善い事ではあるが、無暗に新しい物、變つた物と一途にその方面ばかりに突進して未だ古くても實用の價值十分なる物をも捨て、しまつて新しい變つた物を求めようとする。それが最もありふれた最も不經濟な事である。何も新しい物變つた物がいいと定つたわけでもない。要するに實用的で價値の多い物が最も善いのである。外國品は確かに和製の品よりも勝つてゐる故に人々が舶來品を好むといふ事は當然な事である。然し此の現象を我等は何と見るか。少くとも大和民族の血の流れて居る者は必ず悲しい殘念だと思ふ心が起るに相違ない。それと同時に日本品の粗製亂造を改良して外品に勝る堅固な品を造らんと期する心が起るであらう。外國品は輸入するに多額の税金を要する故國家にとつては實に莫大な損害である。それよりも國產品を用ひて成るべく外國品の輸入を少なくし金の外國に出づる防止せんとするのが實に國家に對する節約の第一である。次に地方に於ても不經濟極まる數例がある。他の地方に於ては最早此の様な習慣は廢止されてゐるに違ひないが、法會についても三

週忌迄は勤めるのが普通であるがもう十年もたつたといふ今日尙命日には近所の人々を招待し饅頭でも出し茶の一杯もいれるといふ事は實に馬鹿らしい事である。此の様な風習は廢止して唯坊さんに一遍の讀經をしてもらふのみで結構なことであると思ふ。然し此の習慣は確かに薄くなつて來た様だ。其の他種々に儀式に於ても派手な交際をしないと恥の様に思つて分不相應な事をやる等皆同様不經濟な事である。

古の名君賢人學者は皆儉約を獎勵し且自分自身も大に質素を守つた。彼の江戸幕府中興の賢主八代將軍吉宗公は實に其の中の第一人者である。彼は元祿以來の華美を戒め、士風の廢怠を矯め且自ら儉約を致して天下を率ゐ、士氣を鼓舞し又一方國產の獎勵にも努力した。故にその下につく諸藩も各々競つて儉約し、武藝を練り而して民富み天下泰平となつた。此の一例を見ても上に立つ者よく下の者の手本を示し以て順次下に及ばさねばならぬといふ事がわかる。要するに上の者も節約し、下の者も自覺して大に節約し、身分の上下を問はず國民全體が質素を旨とし現今の我が國の苦しい立場から一步なりとも早く脱する様大に努力すべきである。(終)

大楠公論

大久保眞順

我が邦古來忠臣義士と崇敬せらるゝもの枚舉するに遑あらず。然り而して未だ楠正成の如く利を忘れ義に嚮ひ一意専心王事に盡瘁したる大忠臣に匹儔する者を覩す。

彼の憂國の士徳川光圀卿は諸國を遍歴し湊川の古戰場に杖を引き、「嗚呼忠臣楠氏之墓」と題せる一基の碑を建て誠忠を後昆に旌表し、朝廷は正一位を追贈し湊川神社を建立し別格官幣大社に列して永劫に其の英魂を奉祀せらるゝも亦宜なる哉。

公の河内なる金剛山西より徵募せられ彼の國靈北條高時を天誅して建武の小康を得、足利尊氏又異圖を企て再び誅鋤の大詔下るや奮然として征討に赴き、而して圖の容れられざるや意を決して湊川に力戦し遂に天命盡き其處に不祿せり。其の間凡そ六裘葛未だ嘗て寧處せず、況んや家庭の團樂をや。斯くて専念國事に鞠躬盡瘁せり、吾人は其の衷情を崇び且奮勵努力して而して尙鼓腹擊壤の樂を奏し得ざりしを汲み此處に一文を弄し以て楠公の誠忠を末ばんとす。

北條氏の僭上は又言ふに忍びず憂國慷慨の志士燕趙悲歌の忠臣四方に蜂起し、朝廷は之を誅夷せんと私かに皇謨を運らし給ふ。今はさしもの北條氏も四面楚歌の聲に包圍せられたり。事關東に漏る、高時盛怒し、將に三軍を叱咤し京師に闖入せんとす。京都大いに震駭し街衢人なし。

後醍醐帝は詮方なく藤原二卿を隨へ、晝は幽谷に逃竄し夜は人目を避けて笠置に落ち給ふ。九重深く御成育ましまして文武百官を繞らし給へる御身の「松の下露」の御製をものしたまへる現狀を恐察し奉つて其の御有様は畏しと言ふも尙餘りあり。

天皇、笠置に駐蹕し給ふ一夜靈夢を夢み給ひて曰く、「奇なる哉、朕の夢むや。紫宸殿の午の方大樹蔚然として樹下に虚位あり、二童子來り漣激として、『天下廣しと雖も今は君を容るゝ餘地なし、獨り此の席あり。』と、既にして夢覺む。朕恩ふに木の南に従ふは楠なり。姓楠なる者ありて朕を輔翊せんとするなるべし。」と、侍者言上して曰く、「然り金剛山下に楠正成なる者あり、彼材武備儼、濟時の材ある者なり。」乃ち徴し給ふ。正成大いに其の知遇に感激し躬を以て國賊に當らんと誓ふ。是唐土に劉備が三顧の知遇に身を捐てんと契りたる諸葛亮の故事に比すべきか。

風起り雲蒸しあはれ英傑の龍變する時は來れり、蛟龍終に池中の物に非ず。

正成曰く、「關東衆なりと雖も烏合の衆のみ。王師寡なるも勇あり、智あり焉ぞ挫折せん、臣馬に策ち力闘せん、若し臣死せず奮戦すと聞召さば幸に宸慮を勞し給ふ勿れ。」と、拜辭して還り赤坂城に據れり。正成

以て己が生死は國家の浮沈たるを知れり。正成、城中に在り寡を以て能く衆を制し、部下を勞はる事猶子の如く、大木、巨石、熱湯を以て敵に對し、或は伏兵を配置し不意に其の虛を衝き大兵を煩はざるは智勇兼備の大樹たるを知るべく、若し治平の世に出でたらんには天晴良宰相たるや必せり。權略能く肯綮に當り實に東西古今の大軍師たるに恥ぢず。已にして城に留るべからざると知るや權數以て敵を欺き而して東行しぬかゝる間に北條氏は遂に帝を捕へ、臣下の身を以て十善の君を絶海の孤島隱岐に遷し奉る、何ぞ其れ大逆無道の甚だしきや。されど天道は惡に組せず、忠臣をして帝を竊かに迎へ奉らしむ。

足利氏事に依りて北條氏と齟齬あり。遂に官軍に黨す、北條氏、爲に士氣沮喪して滅亡の一因をなし而して幾許もなく亡べり。

帝隱岐より還り給ふや既に北條氏亡び海内又敵する者なし。乃ち將士と議して還幸の途に就き給ふ。正成七千騎を以て兵庫に迎謁す。京師に入り光嚴院を排し之に代り大いに功を論じ賞を行ひ足利氏を勳等第一とし給ひ新田、楠氏之に亞ぐ、我を以て之を視れば當に楠公の功級第一たり。當時の人士も亦しかく思ひたりしならんざるに何ぞ圖らん、足利氏第一なりとは、正成は祿賜の多少に依りて志を變ずる卑劣漢に非ず、益々忠勤を勵み尙誠忠の至らざるを歎せ。世に是を建武の中興と言ふ。

足利氏早くより異圖あり、而して建武の大業破れ、天下再び亂麻の如くなれり。遂に尊氏征誅の大詔下る正成蹶然として起ち、轉々として大いに戦ひ遂に尊氏及び其の弟直義をして鎮西に走らしめたり。其の走らんとするや橋梁なく將に溺死せんとする敵兵五百。正成今是一個の梟將に非ず、血あり涙ある仁慈の大將たり。麾下に督して悉く之を救はしむ。敵兵感佩し遂に官軍に従はん事を請へり。是我が邦武夫の長所にして彼は實に智仁勇完備の大將たり。

尊氏等鎮西に走り諸豪族を経略し、捲土重來將に大軍を率ゐて陸に海に京師を犯さんとする。此處に於て正成猶豫する能はず朝廷に獻策して戰略利の多きを言ふ。參議藤原清忠の爲に妨げられ長袖奚ぞ兵略を知らん

と憤怒したれども詮方なく懊々として嬉まず河内の櫻井驛に至る。楠公父子の訣別は普く人口に膾炙せられたる一大悲劇なり。別辭に曰く、「我死せば天下の事又知るべきなり。汝能く心に記して片時も忘るべからず。我が族隸にして一人も存するあらば汝之に將として王事に勵み義を忘れ利に向ひ以て父の忠を墮すべからず。汝是より歸り母に事へ能く孝を盡すべし。身體髮膚之を毀傷するは君に不忠たると共に父に不孝にして正に天地間の一大罪人たるべし。」と。正行軍に従はん事を乞ふ。許さず、袂を投じて起つ。されど其の胸中や如何に。別辭は正成早くも死を決したるなり。我が族隸にして一人も存する者あらば率ゐて以て金剛山址に陣すべしとは一族悉く之に當らんとすと覺ゆれ。其れ楠公の誠忠更に大なるを覺ゆるに非ずや。正行の請を容れざるは己れ死して忠絶せざらしめんとするなり。

正成直ちに湊川に赴き弟正季と手兵六百を以て陣す。此の戦や正成最期の奮闘にして又背水の陣たり、血戦十六合、身に十一創を負ひ鮮血淋漓として衆寡敵し難く民家に走れり。隨ふ者僅かに七十騎。弟正季誓ひて曰く、「人間界に七生して國賊を亡ぼさん。」と。正成荦爾として「其れ我が心を得たり不覺をとりて敵共の物笑とならんよりは自ら死するに若かず。」と。乃ち耦死して果てたり。隨兵悉く殉死す。正成の頸は敵の手を経て河内なる正行の許に送られ、正行母の切諫に飄然心を勵まし益々忠孝の成就を念じたり。

其の狀の奈何に凄絶なりしよ。髣髴として眼前に有り。嗚呼何たる悲劇ぞ。足利氏のかゝる忠臣を殺すだに其の罪死を容れざるべし。

嗚呼哀しい哉。不世出の大忠臣楠公は湊川の苔下に安らかに眠れるか。

青年期は人生の危機

坂 本 至 誠

吾々青年期は實に人生の危機とも稱すべき秋で、肉體上に大變動が起ると共に精神上にも一大動亂を來し

何事にも中正なる權衡を失して極端に流れ易いものである。此の人生の危機を突破し敢然として向上發展の一路を邁進するには必ずや道德の修養に依つて精神の堅實と肉體の健康とを保持し堅忍不拔の覺悟を以つて中正不偏の標的を指して進まなければならぬ。それには第一に信念と勇氣とが必要である。信念と心の光とすれば勇氣は心の力である。暗には光が必要であると同時に、行くには力が必要である。如何に智が明かであるかは迷妄なり、それは誘惑なり、彼は善なり、是は惡なりと知つた所で信念と勇氣とが缺けてゐると一向効果のない場合が尠くない。殊に誘惑にかゝり迷妄に陥る時の如きは其の始めは惡しき事と知りながら意志が弱く信念が乏しかつた爲めについ悪い方へと足を踏み入れるのではなからうか？

西村泊翁先生は知、信、行、と云ふことを言はれてゐる。知つて之を行ふには必ず信念といふものが必要であると言ふ意味であらう。

兎角思想が惑亂し易く誘惑の襲來が多い傾向にある青年期には是非共此の間を照らして、其の進むべき道を明瞭にし、固く取つて動かざるの意志を養成させる信念が必要である。

然しながら假令信念に依つて智が、明かとなり、意志が強固になつても之を行ひ、之を爲すと言ふ心の力がなければ當底實行を見る事は出来ない。されば行ふにあつては勇氣が必要である。即ち勇氣が有つて始めて智、信、行、を全くする事が出来るのである。さりながら青年期の勇氣は兎角血氣にはやり暴虎馮河の譏りを免れぬ事が多い。勇氣とは亂暴な事ではなく、腕力の強い事でもない。この勇氣とは心の力で道義に依つて動く力である。腕力を持たんで亂暴するのが勇氣ではない。惡を刮けて善に進み、邪を挫いて正を行ふ道義の力である。されば信念があり、勇氣があれば假令青年期の危機に遭遇しても決して誘惑に陥り、迷妄に惑ふことはない。だから中正の道を辿つて過まらざらんがため信念と勇氣との必要を高唱してやまないのである。



研究資料

伊吹植物

名畑榮一

○苔蕨部

チヤセンゴケ、カラカサゴケ、ツメゴケ

エビゴケ、ミズゴケ、ジヤゴケ、ヒムロ

ゴケ、ゼニゴケ、

苔葱科

水龍骨科

コケシノブ、

イテフシダ、イブキシダ、イノモトサフ

イハデシダ、イヌシダ、イヌワラビ、イ

ワガネワサウ、イノテ、イワヒメワラビ

イタチシダ、ホシダ、ホテイシダ、ヘビ

ノ子ゴケ、ベニシダ、トキワシダ、トラ

ノヲシダ、チヤセンシダ、オホバイノモ

トサウ、ワウレンシダ、タチシノブ、タ

キミシダ、ウスイタ、ノキシノブ、クモ

ノスシダ、クジヤクシダ、クマワラビ、

裏白科

コシダ、

薇科

ゼンマイ、

瓶爾小草科

フユノハナワラビ、

木賊科

イヌトクサ、ヤマトクサ、スギナ、

石松科

ヒカゲノカヅラ、ベンネンスギ、

卷柏科

イワヒバ、カタヒバ、クラマゴケ、

○顯花植物

一位科

イスガヤ、カヤ、

松杉科

イブキビヤクレン、クロマツ、ネヅ、ア

禾本科

カマツ、ヒメコマツ、ヒノキ、

イブキザサ、イチゴツナギ、ハチク、イ

ブキヌカホ、ハコネダケ、ニハホコリ、

トダシバ、チゴザサ、チヂミザサ、チカ

燈心草科
百合科

スカホシサウ、カウガイセキシヨウ、
イブキワニクチ、ホトトギス、チゴユリ
オホバジヤノヒゲ、オニユリ、ツルボ、
オホバナルコユリ、タツノヒゲ、タニツ
バタチシホデ、ツクバネサウ、ナルコユ
リ、ウバユリ、ノギラン、ヤマジノホト
トギス、ヤマガシユ、ヤブラン、マルバ
ノサンキライ、コヲニユリ、エンレイサ
ウ、アマドコロ、サルトリイバラ、ササ
ユリ、サンキライ、ギバウシ、ミヅギバ
ウシ、シホデ、ジヤノヒゲ、シセウシヨ
ウバカマ、ノカンザウ、ユウスゲ、キチ
ジョウサウ、ユメヤランヒメキズイ、
シタマガリ、マキムバイ、キツネノカミ
ソリ、
トコロ、タチドコロ、ナガイモ、ヤマノ
イモ、ウチドコロ、モミヂドコロ、
ヒフフギ、シヤガ、
オホバノトンボサウ、ムカゴサウ、クモ
キリサウ、セマサギサウ、キンランミヤ

線草科

ラシバ、スカキビ、カラスムギ、オホア
ブラススキ、ヲヒシバ、カニツリグサ、
カモデグサ、ネザサ、ネヅミガヤ、ネマ
ガリダケ、ナルコビエ、ムラサキエノマ
ロ、ウシノケグサ、ウシノシツペイ、ク
サヨシ、コブナグサ、ヤマカモデグサ、
コメガヤ、アシホリ、アブラススキ、サ
サガヤ、サイドガヤ、キンエノコロ、キ
ツネガヤ、メヒシバ、メダケ、ミチシバ
ヒエガエリ、ススキ、ヒメノカリヤス、
スズメノケヤヒキ、スズメノヒエ、ヒメ
イチゴウナギ、
カヤツリグサ、カンスゲ、ナキリスゲ、
ノテンツキ、ヤマキ、マスタサ、コゴメ
カヤツリ、テンツキ、ジュズスゲ、タガ
ネサウ、ヒメシラスゲ、
オホハンゲ、カラスビシヤク、テンナン
シヨウ、ザゼンサウ、
ヒロバノイヌノヒゲ、
カツノキ、ツユクサ、ヤブミヤウカ、

天南星科

穀精草科
鴨路草科

薯
蕪尾科
蘭科

金粟蘭科
楊柳科

樺木科

殼斗科

山毛櫸科

榆科

尋麻科

マウデラ、シユロラン、シユンラン、モ
ヂヅリ、
フタリツツカ、
イマコリヤナギ、イハヤナギ、ココメヤ
ナギ、カハヤナギ、タチヤナギ、ネコヤ
ナギ、ヤマナラシ、コリヤナギ、キヌヤ
ナギ、ヒメヤナギ、シヤナギ、アカメヤ
ナギ、
イヌシデ、ハンノキ、ツノハシバミ、ク
マシデ、コシマムシ、サハシバ、
カシハ、ナラガシハ、シラガシ、ミヤマ
ハハゾ、アベマキ、ウラジロガシ、クリ
クヌハ、アカガシ、ミヅナラ、
ブナノキ、
ムクノキ、ケヤキ、アキニシ、
イタビカヅラ、オホイタビ、カジノキ、
カウゾ、カナムダラ、クソクサ、ヤマグ
ワ、
クラクサ、カテンサウ、カラムシ、ムカ
コイラムサ、ウハバミサウ、アカソマア

檀香科
馬兜鈴科

蓼科

藜科

苋科

蕁香科

石竹科

木蘭科
毛茛科

カリ、ミヤマイラクサ、
カナビキサウ、ツクバネ、
カンアタヒ、ウマノスグクサ、ウスバナ
イシン、コバノカンアフヒ、
イタドリ、イヌタデ、イシミツバ、イブ
キトラノヲ、ハルタデ、ハナタデ、ニソ
マナス、オホイヌタデ、ツルドウダミ、
ヤノネサウ、ムラサキタデ、マヤコノシ
リスダイ、
アカザ、
イノコヅチ、イヌビユ、
ザクロサウ、
ハコベ、カハラナデシコ、ウシハコベ、
ノミノツヅリ、フシグロ、コバノミ、フ
シグロセンノウ、ナグサ、ミミナグサ、
タムシバ、チジキ、サネカヅラ、
ハンシヨウヅル、ボタンヅル、トリカブ
ト、オホナグサ、オネバシヨ、ワウレン
カザグルマ、レイジンサウ、クサボタン
クマガイサウ、ミスミサウ、ヤマシヤク

景天科

ベンケイサウ、マンネンダサ、キリンサウ、メノマンネンダサ、ミツバベンケイサウ、ヒメレンゲ、

虎耳草科

バイクワウツキ、トリアシシヨウマ、チヤメシサウ、ダイモンジサウ、ネコノメサウ、ウラジマラウツキ、ノカラマツ、ノリウツキ、ヤグルマサウ、セブサンザシ、コアジサイアマチャノキ、サハアジサイ、キバナノカハラコツバ、キンザイサウ、ヒメウツキ、ユキノシタ、ウメバチサウ、サキカラマツ、

金縷梅科
薔薇科

マンサク、イヌザクラ、イハキンバイ、リンゴ、イブキシモツケサウ、ニガイチゴ、カハラサイゴ、ワレモガウ、オエビイチゴ、ダイコンサウ、ナンキンナナカマド、ナナマド、ウシロコシ、ウラジロイチゴ、ノイバラ、クサボケ、ヤマブキ、マメザクロ、フサザクラ、コシモツケ、コゴメバナ、コゴメウツス、エビカライチゴ、

木通科
小檗科

ムベ、ミツバアゲビ、イカリサウ、ハイヤウボタン、ナンテシ、イギ、

防已科

オホツヅラ、カフモリズタ、アホツヅラフジ、

樟科

オホバクロモジ、カナクギノキ、ダンカウバイ、クトモゼ、ヤブニツケイ、ヤマカウバシ、アブラチヤン、シロモチ、シロダモ、

罌粟科
十字花科

タケニグサ、クサノワウ、ミセキケコンハタザヲ、ハクザンハタザヲ、ワサビ、オホバコンロウサウ、タチツケバナ、タチスズシロサウ、ツルタガラシ、ナヅナヤマガラシ、ヤマハタザヲ、エゾハタザヲ、キバナハタザヲ、ミヅタガラシ、スカシタコバウ、スズシロサウ、ヒロバノコンロンサウ、

茜香科

カラタケ、アマカゼソウ、サンセウ、フユゼンソウ、コクサリ、カラスノサンセウ、

苦木科

ニザキ、

遠志科
大戟科

ヒナノキンチャク、カキダサ、ヒメハギイモノキ、ニシキギ、タカタウタイ、ナツタウタイ、クサギ、ヤマアイ、アカメガシハ、シラキ、コシアブラ、

黄楊科

フシギソウ、

漆樹科

ヌルデ、ツタウルシ、ヤマフルシ、

冬青科

イヌツゲ、ソヨコ、

衛矛科

ニシキギ、ツクバチ、ツルマサキ、マユミ、コマユミ、ヒロバノツリバナ、サハダツ、

省沽油科

ミツホウヅキ、

威樹科

ハウチハカエデ、トキハカエデ、チドリノキ、カエデ、ツタモミチ、ワリハダカヘデ、エンカウカヘデ、

鳳仙花科

ツリフネサウ、キツリフネ、

七葉樹科

トチノキ、

豆科

テリハノイバラ、フスキナシ、アハイチゴ、キシミヅヒキ、マイチゴ、アムムシロ、ミナモトサウ、シモツケサウ、シロヤマブキ、ウラジロノキ、クマイチゴ、ヤマザクロ、サイフリボク、モミチイチゴ、

牡牛科

酢醬草科

イタチサビデ、イヌエンジユ、ハキ、トウリアメ、ヌスビトハギ、タニワタシ、レンリサウ、カラスノエンドウ、カハラフジ、カハラケツメ、ヨツバハギ、タニワタシ、ネムノキ、ヌユハマ、クサフヂクララサ、チム、クズ、ヤブマメ、マキエハギ、マルバハギ、フジカンサウ、コチツナツ、キハキ、アバナノレンリサウ、ミヤユグサ、ジヤケツノバラ、ヒロバノメスビトハリ、ヒロバノクサブキ、スズメノエンドウ、ノサ、ゲ、イブキフウロ、グンナイフウロ、フウロサウ、ミツバフウロ、ヒメフウロ、オホヤマカタバミ、カヨバミ、